
聖夜ブレーカー

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜ブレーカー

【Nコード】

N6820P

【作者名】

上葵

【あらすじ】

友達のクリスマスデートを妨害してやる！（物語を90%説明）

（前書き）

サントグロースなんていないじゃないですか（再掲）

ネズミ色が空を染める寒い日のことだった。

「今年のクリスマスも俺らだけで寂しく飲み明かすかあ！」

「ごめん24日は用事あるんだ」

「お前、それって……」

「……」

あの日のことを思い出し、唇を強く噛んだ。握りしめた拳には血が滲み、憤怒が身体の奥底ふつふつと湧き上がる。

友よっ！裏切ったな！

12月24日。仏教徒には平日。あと一週間で大晦日。差し迫る年の瀬に焦りを感じていた俺は、バカみたいに賑わった街並みを尻目に、道行く先の男女二人を電柱の影から観察していた。

男の名前は山上健介。俺の親友、だった男だ。過去形の理由は女にうつつをぬかし腑抜けになったからである。元凶の名は、唐沢冬美。この女郎について俺はろくに知らない。ただやつがとてつもない美人だということは確かだ。

その二人を見て、俺は再度覚悟を固める。

今から三日前、クリスマスに飯でも食いに起こうと誘った俺の親切心はきっぱりと断られた時点で、はつきりとした憎悪に変わっていた。

絶対に許さない！

俺は、健介を殺す（ほどの覚悟を決める）ことにした。

生まれて始めてマジで神様（キリストではなく、不動明王だ）にお祈りをした。俺に人殺しをさせてくださいと。

回想は短めに、現実と向き合うことにしよう。そう、現実と。
電柱にしがみつくという出歯亀スタイルの俺の眼前には許されざる光景が広がっていた。

二人は手をつないでいる。

血管がブチ切れるのは充分すぎるほどの要素だった。

怒りをなんとか冷静さで塗りつぶし、今回のミッションに備えて用意した秘密道具を詰めた袋を凍てつくアスファルトの上に下ろした。

「ほんとにやんのかよー。気乗りしねえなあ」

健介の野望を阻止するために呼んだ戦闘要員、武田鳴海は隊員としてあるまじき生あくびをし、頭をぱりぱり掻いていた。

「黙れ！武田あつ！貴様いいのかっ！俺らの友情は溝に捨てられた拳げ句、唾までかけられたんだぞ！この侮辱は、あいつに然るべく報いを与える以外に解決する手段はない！」

「クリスマス毎年集まってたのはただ単に暇だったからだろー」

家が近所で仲良く育った、俺、武田、山上の三人はいわゆる幼なじみという関係で、クリスマスは誰かんちで遊び倒すのを慣習としていた。ところがどっこい山上の野郎、結構いいとこの高校行って彼女つくつたりと、友情関係でやってはいけないことをしやがった。「クリスマス？なにそれ？どっかのマイナーな宗教の慣習を、さも当然のように話題にあげんの止めてくんない？」

「お前なあー。三大宗教がマイナーって頭可笑しいんじゃないのか。イエス・キリストの聖誕祭だろうが」

「立川に帰れってイエスさんに言っけ」

尚もぶつくさ言っているが無視して袋からジャージを取り出し武田に放った。

「きたねえな。なんだよこれ」

「着替えるんだ。お前には特別長袖長ズボンを与えてやる。感謝しろ」

袋からさらに別の体操服を取り出し袖を通す。昼間の道の真ん中での変身シーンは人気がないことによりスムーズに行われた。寒気が容赦なく肌を突き刺すが、内から湧き上がる熱した鉄のような感情で苦にもならない。

俺は冬なのに短パンと半袖というあまりに季節感無視の格好のまま、未だに制服姿の武田を怒鳴りつけた。

「なにやつとる！早く着替える！見失しなうだろうが！」

「お前、こんなところで着替えるっていうのかよ！よくもまあ平然と言つてのけるな。羞恥心というものはないのか？大体着替えてなにするつもりだよ」

「着替えれば教えてやる」

「はあ」

「よかるう。人目が気になるというなら俺は向こうをむいてる、さあ今のうちだっ！」

「まあ制服の上から着るから別にいいけどよ」

武田は不承不承といったようすでジャージを羽織り、ようやく俺の望む姿になってくれた。

「おし、それでは説明する今回の任務は、」

「どうせクリスマス前にカノジョ持ちになった健介に嫉妬して、二人の恋愛を邪魔しようとしてんだろ」

「違う。断じて嫉妬ではない。報復だ」

「でも友達なら素直に祝福してやるのが筋じゃねえかな」

「黙れ！ミッシヨンの説明に戻るぞ」

内心図星をつかれ、焦っていたのは秘密だ。なんとかごまかそうと、俺は武田に向き合った。

「奴ら二人は手をつないでいる。道を広がって歩くなど人間として言語道断、迷惑行為に他ならない！その行為を戒める意味で我々は

――」

「暗くなってきたね」

「冬の日の入りは早いから仕方ないわ。この後どうするの?」

「駅前のイルミネーションでも見にいこうか」

くっ、耳にバカッパルの沸いた会話が飛び込んできやがった。これは毒電波だ。耳をかたむけすぎると、脳にお花畑が展開してしまう!俺はそれをかき消すように大声をあげて、

「さんこおーう!」

「ふあいおうふあいおうふあいおう」

「さんこおーう!」

「ふあいおうふあいおうふあいおう」

二人の手がつながる真ん中をゴールテープ切る駅伝選手みたいに走りぬけた。

「わっ」

背後で驚きの声が響いたが、俺の姿は「マラソンをする三高の陸上部員」にしか見えないはずだ。

「さんこおーう!」

「いや、もういいだろ」

曲がり角を曲がって安心したらしい武田は「ファイトおう!」のかけ声もなしに、いつもの口調に戻って話かけてきた。

「ふっふっふ。上々だ。これで奴らは街中ではやたらめったら手を繋げないということを理解したに違いない!」

「……なあもうやめないか?」

武田は心底呆れたような視線を俺によこした。

「なぜだ!まだ一回目だぞ!やつらのいい雰囲気妨害するための道具はたくさん用意してある!」

「やっぱりまだやるつもりなのかよ」

ここで俺たちが健介を元の道に戻さないと、奴は女に溺れたダメ人間になってしまう。

俺と健介は子供のころに誓ったのだ。大人になったらサンタクロ

ースをふんじばって、袋の中のプレゼントを強奪するって。

あの時描いた夢を諦めないために俺が頑張るしかないじゃないか！

「いいかげん迷惑だと思うぜ。いくらお前が今日誕生日だからってクリスマスを憎みすぎだろ」

「貴様にプレゼントを一緒にたにされた俺の気持ちは分かるまいッ！」

「おまけにバレンタインベイビーだしな」

「この愚昧が！その話題はタブーだとあれほどいっただろ！」

「はいはい。12月24日から妊婦の出産日数といわれる十月十日を単純に引くと2月14日になるのは両親に愛されてる証拠だと、個人的には思うけどな」

「……みんな死ねばいい。この世の不幸を背中に乗せて、絶望の海に沈んでけ」

考えたくもない事実を再確認させられ、俺の気分は落ちに落ちこんでいた。

そうクリスマスイブこと12月24日は俺の誕生日だ。

街がピカピカとイルミネーションで飾りたてられているその日にこの世に生を受けた俺は、クリスマスを心底憎んでいるのだ。

だからその日を祝うカップルなぞ俺にとっては仇敵に他ならない。「む、やつらが移動するぞ！」

落ち込んだ気を無理やり奮い立たせ、移動を開始した二人の後をつける。

さきほどな会話の通り、健介たちは駅前のイルミネーションを見にきたらしい。やつらの周りには、日本人にもかかわらず他国の祭事を祝う男女二人組があふれている。

あ、なんだろう、この内から沸き起こる怒りを通りこした憎悪はひとまずキラキラ輝く電飾でいい雰囲気になりそうなやつらに、ここが駅前だということを思いださせてやらなくちゃ。

袋から、俺はまたコスプレグッズを取り出した。ちなみに秘密道

具がつまった袋は赤い服着た白いヒゲの変質者をイメージしています。

「なんだよその格好」

「B系、くちやくちや、ファッションだじえい」

「なんか色々勘違いしてると思うんだけど」

「どこが、クチャ、ちげえか言つて、クチャ、みろや」

「ガム噛むのやめろ」

「oh・オーケーメン」

今の俺はB系ラッパだ。ダボダボのズボンで野球帽の上からをフード被り、ついでにサングラスもつけている。肩にはラジカセを背負い、完璧とした言いようがない。

武田はどこが不満なのだろう？

「今はつきりわかったよ。お前バカだろ」

「YOYOYO、俺のことデイスってんのか？」

「日本語で喋れ。その珍妙な格好でなにするつもりだ」

「まあ見とけYO。くちや、駅前にや色んな人がいるんだってことをわからせてやつからYO。ちえけら」

「だからガム噛むなつて」

「ohシット」

ぼけつとしたままの武田を放つて、俺は精一杯肩を揺らしてカッブルで賑わう駅前に到着した。くそつ、腰パンしすぎて歩きづらい！
ようやくイリュミネーションに目を奪われる愚民どもに俺のソウルを聞かせてやるときが来たZE。

ラジカセをセット、事前に用意したブレイクビーツを流し始める。

ズンチャ　ズンチャ

「HEY！街クリスマスでみなくなるしみます、道行くやつらはみな社会のクズ！なんで生きてんのかわかんNE！自分の世界にひたつてんじゃNE！」

ズンチャ　ズンチャ

「ここで登場！俺参上！ひげもじゃサンタなんとなく想像！実際しよばいぜ相当！赤い服はコーラの陰謀！チルドレンの夢背負って感動！」

ズンチャ　ズンチャ

「不法侵入ふつうに犯罪、だけど人気でお咎めなし！くそたれジジイにまじシット！グリーンランドからはるばると、もうろくジジイがぶらぶらと！結局サンタはただのロリコン！」

ズンチャ　ズンチャ

「なんだか空気が冷たいＹｏ！お呼びじゃないと理解出来たＹｏ！そんなわけでここらで退場！勝手に幸せになつてろファキンジャブ！」

ズンチャ　ズンチャ　ズーン

冷たい視線とあからさまに敵意むき出しのカップルたちから逃げるように武田の元へと帰った俺は息も絶え絶えに、今の惨状を涙目で語った。

「やばい、まじやばい。空気めっちゃ静まり返つてんの」

「やる前からわかってたことだろ。クリスマスはラブソング以外は全部アウェイだつっつの」

「健介たちはわりかし温かい目で見てくれてただけど、他のカップルがまじ怖いよね。下手したら殺されるんじゃないかと思つたぜ。金髪ツンツンの男が今にも飛びかからん勢いでこつち見てんの！超こええー！」

「ま、ともかくこれで諦めがついたつてもんだ。もう健介たちはほつといて、う、ウチでマリオカートでもしようぜ」

寒空の下待たされて、顔を真っ赤に震えながら武田は言った。悪いことしたなあ、と思いながらも、俺の決心は固いことを武田に教えてやる。

「なに言つてだ？作戦１は失敗したけど、作戦２がまだ残ってる。」

無言になつて移動する健介カップルの気配を感じてほくそ笑んだ。
ミッシヨンコンプリート！

吐き真似をして、カップルのいい雰囲気をぶち壊す作戦はうまく
いったようだ。

二人はどこに行くのだろう。ひたひたと後をつけてみたら、なん
てことはない、冬枯れで裸ん坊の並木道だった。

この先には大きな公園がある。だけど、この時間帯ともなるとそ
こを目指す人ごみはまばらで、やつら、それをいいことにまた手を
つなぎ始めやがった。

絡み合つた指先を見れば恋人つなぎだ。殺意しかわかない。

「健介の野郎、まだ理解してないようだな！なんだったらまたマラ
ソンで妨害してやろうか」

「いや、あれは止めようぜ……。恥ずかしいわ」

「なぜだ？効率がいいと思うんだが」

「お前以外の人には羞恥心つてものがあるんだ」

武田はどうやら着替える過程の話をしているらしい。

しょうがない、とりあえず、手を繋いで歩くという迷惑行為はほ
うっておいてやる。

ほんの爪先ほど優しい気持ちになつた俺に、水面に泡がぷっくり
浮かぶように疑問がわいた。

やつら、どこに行こうとしてるんだ？

前述の通り、この先にはただっ広いグラウンドに近い公園しかな
い。春には桜が満開のこの並木道も、今は木枯らしに震え、奥にい
くほど辺りは真っ暗になっていく。黒の絵の具より真っ黒な寂しい
空間を目指すカップルがいるだろうか？

いなああい！

ではやつらは、その誰もいない公園に行つて、なにをするというんだ？

……

まさ、か…。

いやな予感がふつつつとわいてくる。涙も出て来そうだ。噓だろ

健介……。不純すぎるっ！

シヨックすぎてまともに思考できなくなった俺の眼前で健介と唐沢冬美は足を止めて、二人で向き合った。

「！」

「あつ、おい！」

たまらず駆け出した俺の背中に武田から声かけられる。だけど、立ち止まるわけにはいかない、やつらの、健介のっ！不純異性交遊を、とめなくては！

「僕、あ、いや俺は、昨日のことのように春休みのことを思いだせるよ。あれから三年なんて早いね」

どうやら、やつらにとって、ここは思い出の土地なのだろう！だから目的地は公園ではなくこの桜並木だったんだ！俺の考えていた不埒な行為は目的じゃなかったと安心しながらも、聞こえてきた健介の声にイラつき、ポケットから奥の手としまつておいた例のアレを取り出しドロップキック（もどき）をくりだした。

「うわっ！」

「！」

キックを食らった健介は叫び声をあげて吹っ飛び、唐沢冬美は目を丸くしている。

「よっ！健介！」

何食わぬ顔で、普通に挨拶をする。そつ、こつから先は警戒心を与えてはならない。

「あれ？山本！？こんなところでどうしたの？」

「いやなあに、近くを通りがかったら、お前がいたからさあ、あ、この人、お前のカノジョ？」

俺はわざとらしくも、こちらを見つめる唐沢冬美を指差した。そのアーモンド型のくりくりした綺麗な瞳に見つめられると虜になりそうだった。

「……うん」

健介は顔を真つ赤に頷いた。Shine。

「唐沢冬美といます。どうぞよろしくおねがいます」

怒りを隠す俺に、冷やかな視線を浴びせながら彼女は小さく礼をした。

「あ。こりゃご丁寧にどうも」

くそっ、かわいい。この子に罪はない。悪いの健介だ！

「あ、こいつは山本治郎。高校は別だけど、俺とは幼なじみなんだ」
健介はごく自然な流れで俺を紹介してくれた。それに唐沢冬美は興味あるのかないのかわからない調子で「ふーん」と鼻をならすだけだった。

ふっふっふっ、今に見ているがいい愚民ども、貴様らはすでに俺の奸計にはまっているッ！

「おいおい受験生がこの時期ぶらぶらしてて大丈夫かよー」

まずは軽くジャブ。

「問題ないよ。たまには息抜きしないと能率は下がるし」

「ぐっ」

そうだった。健介はこの辺りじゃ一番頭がいいんだった。
もういい。

頭に来た。なんで頭がいいやつやちゃらんぽらんやつらにも力
ノジョできるのに俺には出来ないんだ！もうみんなShine！
「あっ、そうだラブラブなお前らに俺からのクリスマスプレゼント
だ！」

「なにそれ」

さっそくポケットから取り出した奥の手を健介に差し出す。それは前日、武田と一緒に役所に取りにいった、
「結婚届け！？」

めっちゃ恥ずかしかったが、これを見て、たじろかないカップルはない。

二人の愛を確かめる究極のイベント——結婚！

結婚には祝福は必要だけど、それ以上になくってはならないもの、それは二人の本気度だ。

「そう結婚届だ。健介と唐沢さんのことを思ってこれをプレゼントするぜ」

にやけがとまらない。

当然のことながら、学生のうちで籍入れることを考え交際しているカップルは少ない。ほとんどが遊びかアバンチュール、口では本気と言いつつも心の奥では、いつか訪れる破局をイメージしている。真面目につき合っても、これを前にして易々と判子を押すやつはいないだろう。

ふっふっふ、そう！どちらに転んでもこいつはカップルに気まずい空気を流すのだよ！

「ほら、健介！受けとれよ！結婚すつから付き合ってたんだろ！」

「あ、うん……」

健介の声には微妙に覇気がない。これだけは使いたくなかったが、ふっ、悪いのは山上健介、お前の方だぜ！俺を差し押いてこんな可愛いかノジョをつくるから。

「ほら、なんならボールペンもあるから今サインしちまえ！」

「あー、」

「あれれー、なんか暗いぞお、どうしたんだー？あつ、もしかして俺まズった？」

くっくくく、去り際はあくまでも尾をひくようにだ。

「ごめつ、まじごめん！俺だけ焦りすぎたみたいだなあー！いやあー、まだ結婚届けは、はやかったよねえ」

俺は最後にできるだけうざく、健介たちに心にもない謝罪をし、結婚届けを持って踵を返そうとした

時だった。

「まて」

「え？」

「どこに行くんだ？」

どこかトゲのある口調で呼び止められた。一瞬声の主がわからなくてうるたえたが、なんてことはない、多少小高いその声質は唐沢冬美以外の何者でもない。

「ど、どこって、帰ろうかと……」

「それクリスマスプレゼントなんだろ？なんで持って帰ろうとしてるんだ？」

こ、こんな手厳しい口調で話をする人だったのか。

「いや、だって、ねえ」

俺は誰ともなしに同意を求める。唐沢冬美は俺の手の結婚届けを指差したまま、呟いた。

「貸してくれ。サインするから」

「え？」

「山本、治郎さんといったかな。なかなか粋なことをしてくれるじゃないか」

言うやいなや、手から結婚届けとボールペンを奪われた。彼女はそれに手の平を下敷きにしながら、器用にも自分の名前を書き付け、ぷい、っと健介に渡した。

嘘だろ？おい、なんで平然としてんだよ。

「ほら受けとれ。もちろん今はまだ無理だろうが、これを前提として二人で愛でも育むか」

「ふっ」

健介はそれに吹き出しながらニヤニヤしつつ紙を受けとった。

「健介、お前の友達は面白いな。山本さん、感謝するよ」

「う、あ、う」

声が口から出てこない、健介が後ろですらすらとサインをしているのを見たら、俺はなにをしてたんだろうと考えさせられてしまう。

「うおおおおおお！」
たまらずその場から駆け出した。

必死に走って武田の元に戻った俺は喉が枯れるくらいに叫び、膝をついて土下座した。

「もうやだもうやだもうやだようおおおお」

「どうした？テンション高いな」

「俺が悪かった！俺が悪かったから、コレ以上現実を見せないでくれ！呪われるべきはこの私だッ！」

「……なにがあつたか言ってみ」

俺は武田にすべての事情を話した。

妨害しようと婚姻届けをだしたこと、素知らぬ顔でサインされたこと、二人の愛は本物だったこと……。

すべてを聞き終わった武田は小さく溜め息をつき、「もうそんなくだらない事をすんなよ」と俺を注意してから続けた。

「そもそもクリスマスに絶望を感じるのはお前の勝手だけだよ」

「俺は、絶対にクリスマスをつ、いや、カップルを許さない！俺、将来教師になるよ！教師になって、青春を歩もうとする学生に暗黒時代をプレゼントしてやるんだ！」

「話聞けよ」

武田は将来の夢を決定した俺の頭を軽く小突いた。

「だいたいお前だってクリスマスに女の子と二人っきりで過ごしてんじゃない」

「あ？なんの話だ？」

「はあ、もういいよ。どうせお前の中では私は女の子になってもいいよ」

「武田？」

武田は小さく息をついて、赤く染まった頬を温めるように手の平でつつみこんだ。

そういえばこの女も不思議なやつだ。クリスマスという記念日に

一緒にいるべき男がいなかったって、俺の提案に乗ってくれるなんて。健介の妨害は上手くいかなかったけど、まあ、よっぽど暇だったのだろう。

二人で何も言わずに自宅を目指して歩きはじめる。もう帰ろう。帰って明石家サンタでも見て、寝よう……。

「ほら」

「あ？」

道の途中、すべてを睨みつけるような三白眼で唇を尖らせた武田は灰色のマフラーを俺に差し出していた。

「なんだこれ？」

「なにしてプレゼントだよ。た、誕生日プレゼント！」

「ほう、流石手芸部と言ったところだな」

俺は、素直にそのマフラーを受け止めて、秘密道具といっしょのでかい袋にいれた。

「あ、おい何しまってたんだよ」

「え？だって今別に寒くないんだもん。怒りか興奮かわからないが、体はホットホットなわけ。そんな時にマフラーなんて首がごわついて気持ち悪くなるわ」

「はあ、お前ほんつとにデリカシーがないよな」

「なんの話だ？」

武田は心底呆れたように白い息を吐いた。

高校三年のこの時期に、そんな余裕はあるはずがないのはわかっていたが、こうして俺の１８のクリスマスは過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6820p/>

聖夜ブレーカー

2010年12月24日14時25分発行